20230830　「無農薬野菜作りへの挑戦！」

茨城県東海村で長年サツマイモを栽培してきた照沼勝浩さんは、農薬や化学肥料、除草剤を一切使わない農業に挑戦しています。そのきっかけは、近隣で起きた農薬散布事故でした。自分の農園の従業員や近隣住民の健康、土壌汚染などが心配になったといいます。しかし、実際にやってみると想像以上に厳しい現実がありました。28 年前の初挑戦では、上手くいかず挫折し、19 年前の再挑戦でも収量は 10 分の 1 にまで減りました。8 年ほど前から収量は増え始め、ようやく以前の 8 割ほどの収穫が見込めるようになったということです。
「土を健康にするには時間がかかる。堆肥はほぼ上手くいかない。農家は本当のことを教えてもらっていない。」と照沼さんは語っています（The Asahi Shinbun GLOBE＋朝日新聞編集委員：石井徹）。
鹿沼さんの実体験やスリランカの失敗でも明らかですが、化学肥料から堆肥などの有機農法への転換は、想像以上に厳しく、痛みを伴います。心配なのは、日本は化学肥料原料をほぼ 100％輸入に頼っているという現状です。化学肥料の主成分は、窒素・リン酸・カリウムですが、そのうちのリン酸アンモニウムのほとんどは中国からの輸入です。国際関係の緊張が、日本の食の土台を危うくします。日本も有機農法への転換を急に迫られる事態になったら、その年のあらゆる農産物の収量は半分にも満たなくなってしまうのではと心配になります。しかし、これは地震などの自然災害と違って、戦略的な行動によって回避可能なリスクです。健康な食生活、国際理解、世界平和･･･みんなつながっているのですね。今の農業について知り、未来について考えること、そして、何がどうあっても話し合いで解決を模索する態度と信念を培うことが、今を創る大人にとって、そして、これからの未来を創る子どもたちにとって大切なことだと考えずにはいられません。